

FOR:ELIZABETH

全キヤラ

音声収録台本

シーン

FOR ELIZABETH台本

■ボイス	■キャラクター	■台詞
		//=====
		//タイトル
		//FOR:ELIZABETH
		//原案・脚本
		//結崎 有理
		//=====
		#01この世で一番愛しい味
		//足音 (エドガーが犯行を行う為女を追いつめている)
EDG_A1_0001	エドガー	「忘れられない、味があった」
		//モノローグ
OT5_A1_0001	被害者の女A	「い、こないで……」
OT5_A1_0002	被害者の女A	「いやだこんなの……っ！！ (泣きながら)」
LIS_A1_0001	ライザ幼少	「いやだこんなの……っ (泣きながら)」
		//この後のリサの台詞から使い回し
EDG_A1_0002	エドガー	「妹と同じことを言うんだな」
OT5_A1_0003	被害者の女A	「え……？」
		//これをきっかけに回想シーンに入る
DAD_A1_0001	父親	「食料を探しにいこう。きつともうすぐ救助隊がくるはず……」
MAM_A1_0001	母親	「そう言い続けてもう何日経ったの！？ 救助なんてこない。私たちここでみんな飢え死に……ああ、キャンプなんか来るんじゃないわ」
DAD_A1_0002	父親	「そんなことを言っても仕方ないだろう。ほらさつさつさつを見かけた。あれが捕まえられたらしばらくは……」
		//キャンプに来て遭難してしまった一家。救助も来ない極限状態。
EDG_A1_0003	エドガー	「その日の記憶はおぼろげだけれど。その時の味だけは、とても鮮明に覚えている」
		//モノローグ

EDS_A1_0001	エドガー幼少	「んん……寒い、な」 //野宿中。寒さで目が覚める。 //焚き火の音
EDS_A1_0002	エドガー幼少	「でもとても眠くて……そしてお腹がすいている」
EDS_A1_0003	エドガー幼少	「このまま死んでしまうのかもしれない」
LIS_A1_0002	ライザ幼少	「ばばやめて！！ いやだこんなの……」 (泣きながら)
DAD_A1_0003	父親	「しかたがないんだよこれは。だから、俺たちが生き延びる糧となってくれ……！」 //らちぎを殺して食料にしようとする父親と、止めようとする幼い娘
EDS_A1_0004	エドガー幼少	「遠くで……リサと、とうさんの声……リサが泣いてる？」
EDS_A1_0005	エドガー幼少	「生き延びる糧ってどういう意味？ 仕方がない？ リサ、やめていやだよこんなの……」
EDS_A1_0006	エドガー幼少	「まさかとうさん、リサを……食べる気じゃ？」
EDS_A1_0007	エドガー幼少	「うわあああああ (逃げ出す)」 //死にかけて冷静な思考ができない。勘違いをして逃げ出してしまふ。
DAD_A1_0004	父親	「ッ！？ エドガー！？」
LIS_A1_0003	ライザ幼少	「兄さん！！？」 //寝ていたはずなのに突然奇声をあげて走りだしたエドガーに驚く
EDS_A1_0008	エドガー幼少	「逃げなきや殺される……逃げなきや逃げなきや逃げなきや……しにたくない」
DAD_A1_0005	父親	「やつと追いついた。どうしたんだエドガー？ ほら、はやく母さんたちのところへ戻ろう」
EDS_A1_0009	エドガー幼少	「子供の足じゃ簡単に追いつかれる。もう逃げられない死にたくないのに」

EDS_A1_0010	エドガー幼少	「なら、殺される、前に」
EDS_A1_0011	エドガー幼少	「うわああああああ！！！！」
DAD_A1_0006	父親	「エドガー、何を！？」 //エドガー、父を崖から突き落とす
EDS_A1_0012	エドガー幼少	「殺される、前に……ッ！？」
EDG_A1_0004	エドガー	「そこに広がっていたのは一面の赤……そして」 //エドガーはふらふらと寝床へ戻ってくる //焚き火の音
EDS_A1_0013	エドガー幼少	「……おなか、すいたな」 //ぐつぐつと鍋の煮える音
EDS_A1_0014	エドガー幼少	「これは……肉？ ……ああ、リサの」
EDS_A1_0015	エドガー幼少	「しにたくない……これを食べば……またしはらくは飢えから解放されるのだろうか？」 //咀嚼音→SEだけでいいかな？
EDG_A1_0005	エドガー	「この世で一番美味しいものは——人の肉」 被害者の女「ひっ……！」 //現在に戻る。 //SE_ナイフで首を斬り、女が倒れる //SE_懐中時計の落ちる音 //SE_足音 //SE_懐中時計をひろう //アイリスが犯行現場に通りがかり、懐中時計を拾う #02_ぐーカリー“マケニット” //ハンドベルの音
IRI_A1_0001	アイリス	「いらっしやいませー！！！！ただいま開店です！！！！」 //ガヤの声

IRI_A1_0002	アイリス	「順番に並んでくださいーいー!!最後尾はこちらです」
EDG_A1_0006	エドガー	「2ペンスになります。ありがとうございます」
OT1_A1_0001	客A	「ミートパイ4つとクロワッサン4つ」
EDG_A1_0007	エドガー	「1シリング1ペニーになります。ありがとうございます」
	□	
OT2_A1_0001	客B	「ミートパイ2つ」
EDG_A1_0008	エドガー	「申し訳ございません……先ほどで本日の分は完売致しました」
		//ハンドベルの音
IRI_A1_0003	アイリス	「ミートパイ完売致しましたー!!!ありがとうございますー!!!!」
OT3_A1_0001	客C	「えー、もう売り切れえ?」
OT4_A1_0001	客D	「新聞にも載ったベーカリーマケニットの絶品ミートパイー!食べてみたかったなあ」
		//カヤの声
IRI_A1_0004	アイリス	「今日もお疲れ様です、エドガーさん」
EDG_A1_0009	エドガー	「ああ……いつもありがとう、アイリス」
IRI_A1_0005	アイリス	「ふふっ、いいんですよ!バイトなんだからもつとゴキ使ってください♪」
EDG_A1_0010	エドガー	「そんな……でも助かるよ。こんな人数俺1人じゃとても捌けないから」
IRI_A1_0006	アイリス	「すごいですよねえ!開店前から大行列、開店30分で完売なんて。一日50個なんて言わずにもつと作ったら儲かるのに」
EDG_A1_0011	エドガー	「ミートパイは……下準備とか色々手間がかかるから……50個が限度なんだよ」

IRI_A1_0007	アイリス	「知ってます？ 新聞で話題になってるんですよー。“この世で一番美味しい絶品ミートパイ”って！」
EDG_A1_0012	エドガー	「新聞は煽るのが好きなだけだ」
IRI_A1_0008	アイリス	「もー謙遜ばかり！ 人手が足りないなら言ってくれたらお手伝いしますよ？ 朝だけじゃなくて昼休みとか」
EDG_A1_0013	エドガー	「君はまだハイスクールだろう？ 孤児院での手伝いもあるんだし、バイトばかりしないでそっちに専念した方がいい」
IRI_A1_0009	アイリス	「ちえー。まるで神父様みたいなこと言っただから」
EDG_A1_0014	エドガー	「俺に……神父様は務まらないよ。それより、時間大丈夫かい？」
IRI_A1_0010	アイリス	「時間……やっぱ！？ もうすぐ9時！ 学校いかなきゃ！ また夕方きますね」
		//アイリス走り去る
EDG_A1_0015	エドガー	「まったく、いくら近いからって学校前にバイトなんて… …無茶をする子だな……」
		#03_クラスメイトのうわさばなし
AIM_A1_0001	エイミー	「でねー？ 路地裏に血痕と首だけが残っててー、首から下はみつかってないんだってー」
BRI_A1_0001	ブリジット	「きゃーこわい！！」
	□	//教室のドアが開くとともにチャイムが鳴る。アイリスが滑りこんできた。
AIM_A1_0002	エイミー	「あー！ やーつと戻ってきたあ」
BRI_A1_0002	ブリジット	「遅いよアイリスっ！ もうちよつとでアウトだったよお」
	□	
IRI_A1_0011	アイリス	「（せーはー言いながら） くくっ……でも本鈴はままだし、ぎりせーア、でしょ？」

AIM_A1_0003	エイミー	「本当ギリギリだけどね！」
BRI_A1_0003	ブリジット	「朝からバイトなんてよくやるよお。見つかったらすっぴい怒られるよ？」
IRI_A1_0012	アイリス	「だってパン屋さんは朝が一番忙しいんだよ？」
AIM_A1_0004	エイミー	「あーマケニットで働いてるんでしょ？ ミートパイで有名な！」
BRI_A1_0004	ブリジット	「お昼になったらすぐ完売しちゃらって、新聞にも載ってたよ！ そりゃ忙しいよねえ」
IRI_A1_0013	アイリス	「うん、今日も大忙しだったよ。15分で売り切れちゃった」
AIM_A1_0005	エイミー	「くえーいいなあ！ 私も食べてみたーい！」
BRI_A1_0005	ブリジット	「今度お土産に持ってきてよ」
IRI_A1_0014	アイリス	「だめだめ。食べたかったら買いに来てね」
AIM_A1_0006	エイミー	「けちー！」
BRI_A1_0006	ブリジット	「あ、くら、うしろー！」
AIM_A1_0007	エイミー	「えっ？うわっ！ (後ろを歩いてきたライザにぶつかる)」
LIZ_A1_0001	ライザ	「…………… (少し冷やかにエイミーをみる)」
AIM_A1_0008	エイミー	「あ……ごめ」
		//ライザ無言で立ち去る
BRI_A1_0007	ブリジット	「なにあれ感じわるー！」
IRI_A1_0015	アイリス	「ああもう、ライザったらまたあんな冷たい態度とってー」
BRI_A1_0008	ブリジット	「そういえばアイリスあいつと仲良いよね。なんで？」

IRI_A1_0016	アイリス	「同じ孤児院で育ったんだよ。ライザはもう新しい家がみつかったけど」
AIM_A1_0009	エイミー	「会話成り立つの……？」
IRI_A1_0017	アイリス	「あはは、本当はいい子なの！ ちよつと人見知りするだけで……可愛いところもあるんだよ？」
AIM_A1_0010	エイミー	「可愛いところ……あいつに？」
IRI_A1_0018	アイリス	「例えば……うさぎが好きだったり」
BRI_A1_0009	ブリジッド	「えー……想像できな……い……！」 //チャイムが鳴る。
AIM_A1_0011	エイミー	「あ、授業はじまるね。次なんだっけ？」
BRI_A1_0010	ブリジッド	「お裁縫！ あのせんせーうるさいし早く席に戻らなまや」 //バタバタと席に戻る //お裁縫の授業＝女学校＝ライザも女の子という伏線
LIZ_A1_0002	ライザ	「また朝からバイト？ (アイリスの隣の席に座りながら)」
IRI_A1_0019	アイリス	「あ、ライザ。さっきのはよくなかったよ？ あんまり冷たくするとみんな怖がつちやうんだから」
LIZ_A1_0003	ライザ	「別に冷たくしてるつもりはないんだけど」
IRI_A1_0020	アイリス	「他人から見て冷たかったら一緒なんですー」
LIZ_A1_0004	ライザ	「あーはいはい。今度から気を付けるよ。で、さっきの質問には答えてくれないの？」
IRI_A1_0021	アイリス	「なんだっけ？」
LIZ_A1_0005	ライザ	「はあ……。 (ため息) 今朝もバイトだったのかって」 □
IRI_A1_0022	アイリス	「ああそうそう！ とゆーか日曜日以外は毎日だよ」

LIZ_A1_0006	ライザ	「よく働くね……で、日曜日は孤児院の教会でミサとか手伝いするんでしょ？」
IRI_A1_0023	アイリス	「これくらい全然平気だよ！ ライザこそお家のお手伝い頑張ってるんじゃないの？ 新しい家は慣れた？」
LIZ_A1_0007	ライザ	「ああ……まあね。父さんがろくに家事できないから家のこととか全部やってる」
IRI_A1_0024	アイリス	「お父さんって確か警察官だったよね？ やっぱり忙しそう？」
LIZ_A1_0008	ライザ □	「だいぶね。首切り連続殺人鬼の捜査で駆け回ってるよ」
IRI_A1_0025	アイリス	「首切り殺人鬼……？」
LIZ_A1_0009	ライザ	「知らないの？ 今巷で大騒ぎだよ、新聞にも一面で載ってる」
IRI_A1_0026	アイリス	「マケニットの記事しか目に入ってなかった (照れ笑い)」
LIZ_A1_0010	ライザ	「はあ…… (ため息) 好きだね、パン屋」
IRI_A1_0027	アイリス	「す!!!!!!? すすすすすきつて、いやあの別に私エドガーさんにそういう感情を抱いてるわけではなくてこれは憧れ! そう憧れ!」
LIZ_A1_0011	ライザ	「いや……仕事好きだねって言いたかっただけなんだけど。そういう意味に捉えるのか」
IRI_A1_0028	アイリス	「へっ!?! あ、ああう……騙されたあ……」
LIZ_A1_0012	ライザ	「別にそんなつもりもなかったけど……好きなの？ エドガー、サン」
IRI_A1_0029	アイリス	「きゃ————!!!!」
LIZ_A1_0013	ライザ □	「……ふーん (ちよつと不機嫌になる) あ、先生来たよ」
IRI_A1_0030	アイリス	「きゃ————!!!!」

#04_女の子の写真

//ドアベルのなる音

EDG_A1_0016 エドガー 「ありがどうございました。……もうそろそろあの子が来る時間か？」

EDG_A1_0017 エドガー 「っ！？ あれ、おかしいんで……懐中時計、いつもここにいれてるのに」

//ドアベルのなる音

EDG_A1_0018 エドガー 「いらっしやいま」

IRI_A1_0031 アイリス 「こんにちはー！！ 今朝ぶりです！」

EDG_A1_0019 エドガー 「朝も夕方も元気だな」

IRI_A1_0032 アイリス 「元気が取り柄ですから！」

EDG_A1_0020 エドガー 「(くすつと笑って) いいことだ」

IRI_A1_0033 アイリス 「……！ (照れる) は、はい」

EDG_A1_0021 エドガー 「俺の妹も……元気が取り柄で、笑顔が愛らしい子だった。少し君に似ていたかもしれないな」

IRI_A1_0034 アイリス 「その妹って……エリザベス、さん？」

EDG_A1_0022 エドガー 「！？ どうしてその名前を」

IRI_A1_0035 アイリス 「エドガーさん、これ……エドガーさんのものじゃないですか？」

//懐中時計をみせる

EDG_A1_0023 エドガー 「！！ ど、どこでそれを……っ！？」

IRI_A1_0036 アイリス 「店の入口で見つけたんです。写真が入ってて……この女の子、エリザベス・カルヴァートって書いてあるから。エドガーさんのファミリーネームもカルヴァートですよな？」

EDG_A1_0024 エドガー 「……せ」

IRI_A1_0037	アイリス	「え？」
EDG_A1_0025	エドガー	「それを返せ！！今すぐに！！！！（本気で怒る）」
IRI_A1_0038	アイリス	「っ！！ な、なんで怒ってるんですか？」
EDG_A1_0026	エドガー	「いいからっつちによこせ！！」
IRI_A1_0039	アイリス	「きやあ！！」
		//エドガー懐中時計を取り返す
EDG_A1_0027	エドガー	「はあ……はあ……（少し息切れ）」
		//くぼく沈黙
IRI_A1_0040	アイリス	「う、うめんなさい……（消え入りそうな涙声で）」
EDG_A1_0028	エドガー	「……い、いやすまない。君は何も悪くない。ただ拾ってくれただけなのに……怒鳴って悪かった。だからもう泣くな、リサ」
IRI_A1_0041	アイリス	「え？」
		//ドアベルが鳴る
LIZ_A1_0014	ライザ	「女の子を泣かすなんて、趣味が悪いんじゃないですか？」
EDG_A1_0029	エドガー	「……誰だ君は」
IRI_A1_0042	アイリス	「ら、ライザ？ なんでここに」
LIZ_A1_0015	ライザ	「夕飯の買い出し帰りに通りを歩いたら、怒鳴り声がきこえたもんでね。見たらアイリスが泣いてるし」
EDG_A1_0030	エドガー	「君には関係ないだろう」
LIZ_A1_0016	ライザ	「一応友達なんで、泣かされてるの黙ってみてるわけにもいかないでしょう」
IRI_A1_0043	アイリス	「ち、ちがうの。私がエドガーさんの大切なものを勝手にちやっただから……」

LIZ_A1_0017	ライザ	「ああ、あなたがエドガーさん？ ふーん (じろじろ見つめる)」
EDG_A1_0031	エドガー	「……なんだ」
LIZ_A1_0018	ライザ	「別に？」
EDG_A1_0032	エドガー	「客じゃないなら帰ってくれ。冷やかしてはくれないんだ」
LIZ_A1_0019	ライザ	「アイリスも連れて帰っていいんでしょう？」
IRI_A1_0044	アイリス	「え、でも今からバイト……」
EDG_A1_0033	エドガー	「今日はもう帰った方がいい。いても辛いだけだろう」
IRI_A1_0045	アイリス	「そんな、ことは……」
EDG_A1_0034	エドガー	「俺も頭を冷やす、本当にすまなかった。明日は日曜日だからまた月曜日の夕方、待ってるよ」
IRI_A1_0046	アイリス	「……！ はい！ (嬉しそうに)」
LIZ_A1_0020	ライザ	「……帰るよ、アイリス (不服そうに)」
IRI_A1_0047	アイリス	「え、ちよちよちよつとまってライザ！ エドガーさん、また月曜日！」
		//ドアベルのなる音
EDG_A1_0035	エドガー	「何をやってるんだ俺は……あの子だけは、泣かせたくなかったのに」
		//懐中時計を開いて写真を眺める
EDG_A1_0036	エドガー	「リサ……」
		#05_エドガー・カルヴァート //2人が歩く足音
IRI_A1_0048	アイリス	「ライザ、怒ってる？」
LIZ_A1_0021	ライザ	「ああ、ごめんね。怒ってると言えば怒ってるけどそれはアイツに対して」

IRI_A1_0049	アイリス	「エドガーさんは、悪い人じゃないのよ。いつもは優しいの」
LIZ_A1_0022	ライザ	「そりやまあ、アイリスが好きっていうくらいだからそうなんだろうけど。でも気に入らないんだよ」
IRI_A1_0050	アイリス	「そんなこといわないで？ ……エドガーさんはちょっとぶり不器用だけど優しくて、私にもよくしてくれてるんだから」
LIZ_A1_0023	ライザ	「恋は盲目って言葉知ってる？」
IRI_A1_0051	アイリス	「盲目でもいいよ。その人の素敵などこだけ見つめてられたらそれでいいもん」
LIZ_A1_0024	ライザ	「はあ……。なんでそんなに好きなの？」
IRI_A1_0052	アイリス	「なーいしょ！」
LIZ_A1_0025	ライザ	「ふーん。ま、いいけど」
		//夜の音
EDG_A1_0037	エドガー	「忘れられない、味があった」
OT6_A1_0001	被害者の女B	「ひ、ひい！ 誰か助け」
		//鋭いナイフの音
OT6_A1_0002	被害者の女B	「ぐあ、ああ……。 (首を斬られて死ぬ) 」
EDG_A1_0038	エドガー	「今度は、あの味に近いといいんだけどな。ちょっと年増すぎか？」
		//死体を運んで穴へ落とす
EDG_A1_0039	エドガー	「つしよつと (死体の入った袋を投げる) 」
EDG_A1_0040	エドガー	「……首があると袋に入らないんだよな。首からは使わないから別において行けばいいんだが」
		//ナイフで首を切り落とす音

EDG_A1_0041	エドガー	「んっ (ナイフの血をはらう)」
		//ナイフを捨てる音 //エドガーは凶器を現場に捨てているが発見されない→何者かが現場から回収している
EDG_A1_0042	エドガー	「ふう。さて、仕事の時間だ」
		//肉を切り分ける
EDG_A1_0043	エドガー	「ぜえ、はあ……」
		//ミンチにする音
EDG_A1_0044	エドガー	「さて」
		//ぐちゃ (パイに人肉ミンチを仕込む音)
EDG_A1_0045	エドガー	「この世で一番、うまい物は……」
		//オーブンにパイをいれる→火の音
EDG_A1_0046	エドガー	「人の肉だ」
		#06_首切り殺人鬼ジャック
IRI_A1_0053	アイリス	「はあ、バイト気まずいなあ」
LIZ_A1_0026	ライザ	「休めば？」
IRI_A1_0054	アイリス	「いやそういうわけにも……」
AIM_A1_0012	エイミー	「ねえきいたー!?! 昨日また出たんだって、首切りジャック!」
BRI_A1_0011	ブリジッド	「こわーもう夜一人で歩けないよお!」
AIM_A1_0013	エイミー	「ホント。早く捕まえてくれないかなあ、ヤードは」
IRI_A1_0055	アイリス	「なあになに、またその話？」
BRI_A1_0012	ブリジッド	「アイリスう。だってさーこわいんだもん。現在進行形でこの近辺を殺人鬼がうろろろしてんだよ!?!」

IRI_A1_0056	アイリス	「た、確かにそれはちよつとこわいかも……」
AIM_A1_0014	エイミー	「あ、でもね。今日は大丈夫だよ。日曜日だから」
LIZ_A1_0027	ライザ	「…… (聴き耳を立てている) 」
IRI_A1_0057	アイリス	「え? どういうこと?」
AIM_A1_0015	エイミー	「首切りジャックが現れるのは日曜日の夜だけなんだよ」
	□	
IRI_A1_0058	アイリス	「日曜日の……夜?」
LIZ_A1_0028	ライザ	「ねえ、その話詳しく聴かせて」
BRI_A1_0013	ブリジッド	「ら、ライザ?! え、べ、別にいいけど」
AIM_A1_0016	エイミー	「珍しいね? 私たちの会話に混ざってくるなんて」
LIZ_A1_0029	ライザ	「ちよつとその噂話に興味があつて」
BRI_A1_0014	ブリジッド	「女の子とかは特に帰り遅くなつたら怖いもんね」
IRI_A1_0059	アイリス	「でもなんで日曜の夜だけなんだろう」
BRI_A1_0015	ブリジッド	「仕事の関係上、とか? 日曜日が休みだから」
LIZ_A1_0030	ライザ	「もしくは日曜日しか一人になれる時間がない……」
IRI_A1_0060	アイリス	「…… (心当たりがある) 」
LIZ_A1_0031	ライザ	「他にはなんか特徴ないの? 連続殺人つて言われるくらいだから特徴的なんですよ?」
AIM_A1_0017	エイミー	「え、えーでも新聞に載つてたことくらいしか知らないよお。いつも現場には大量の血痕と首から上だけが残されてるとか」
LIZ_A1_0032	ライザ	「胴体はみつかつてないんだっけ?」
AIM_A1_0018	エイミー	「うん、そう。犠牲者はこれで7人目」
BRI_A1_0016	ブリジッド	「7人!?! なーんでまだ捕まつてないのよー」

AIM_A1_0019	エイミー	「とにかく首以外、凶器すら出てこないから証拠もみつからないんだって」
BRI_A1_0017	ブリジット	「首から下どこにいつちやっただらうね？」
AIM_A1_0020	エイミー	「まったく見つからないっておかしいもんね。どっか埋めたとか海に捨てたとかならそのうち見つかりそうだけど」
	□	
LIZ_A1_0033	ライザ	「……食べたとか」
AIM_A1_0021	エイミー	「は!?! 死体を!?! あんたぼっかじやないのきも」
LIZ_A1_0034	ライザ	「冗談だよ」
BRI_A1_0018	ブリジット	「冗談にしても趣味悪すぎだよ……最低!」
		//生徒たち立ち去る //教室を出て帰り始める
IRI_A1_0061	アイリス	「なんであんなこと言ったの？」
LIZ_A1_0035	ライザ	「ちよつと頭に浮かんだだけなんだよホントに」
IRI_A1_0062	アイリス	「ドン引かれるにきまつてるじやないも!」
LIZ_A1_0036	ライザ	「別に引かれようが構わないさ」
IRI_A1_0063	アイリス	「友達できないよ？」
LIZ_A1_0037	ライザ	「余計なお世話」
IRI_A1_0064	アイリス	「あれ、ライザ家の方向こっちじやないよね？」
LIZ_A1_0038	ライザ	「物騒な噂を聞いたし、送ってこうかと思つて」
IRI_A1_0065	アイリス	「ライザだつて危ないでしょ。私バイトいくし大丈夫だよ」
		//殺人鬼は若い女しか狙わない＝ライザを心配するのはライザが女の子だという伏線
LIZ_A1_0039	ライザ	「大丈夫、いいから送らせて」

IRI_A1_0066	アイリス	「はあ……あ、もしかして私がバイト行くの気まずいって言ったから気を使ってくれてる？」
LIZ_A1_0040	ライザ	「……そんなんじゃないよ。商店街で買い物するしついでだつて (凶星)」
IRI_A1_0067	アイリス	「くすくすくす、そつぎと言つてること違うじゃない」
		//ドアの音
IRI_A1_0068	アイリス	「こんにちはー!!!」
EDG_A1_0047	エドガー	「こんにちは、来てくれたのか。酷いことを言ったからもうこないかと思った」
IRI_A1_0069	アイリス	「あれは私が悪いんです。エドガーさんは気にしないでください」
EDG_A1_0048	エドガー	「いや、本当にごめん。……君はお客さんかな？」
LIZ_A1_0041	ライザ	「……じゃあミートパイをひとつ」
IRI_A1_0070	アイリス	「こんな夕方じゃもうミートパイなんか残つてないわよ大人気商品なんだから！」
		//笑いながら、自慢気に
EDG_A1_0049	エドガー	「そういうわけなんだ、すまないね」
LIZ_A1_0042	ライザ	「残念。じゃあフランスパンで」
EDG_A1_0050	エドガー	「2ペンスだ」
LIZ_A1_0043	ライザ	「はい」
EDG_A1_0051	エドガー	「どうも」
LIZ_A1_0044	ライザ	「じゃあ帰るけど……アイリス、バイト終わったら迎えに来ようか？」
IRI_A1_0071	アイリス	「え、どうして？」
LIZ_A1_0045	ライザ	「ほら、連続殺人事件」

IRI_A1_0072	アイリス	「ああ……でもあれは日曜の夜だけでしょ？」
EDG_A1_0052	エドガー	「……何の話だ？」
IRI_A1_0073	アイリス	「最近このあたりに連続殺人魔がでるんですって。なんでも毎週日曜日の夜に一人殺して首だけおいてくっっている」
	□	
EDG_A1_0053	エドガー	「へえ、そいつは物騒だ」
IRI_A1_0074	アイリス	「怖いけど、今日は月曜日だから大丈夫よ」
LIZ_A1_0046	ライザ	「いつ殺人鬼のスケジュールが変わるかわからないだろ？ そうでなくても夜に一人で出歩くのは危ないよ」
EDG_A1_0054	エドガー	「そうだな……君の言うとおりで。アイリスは俺が送って いこう」
IRI_A1_0075	アイリス	「え、そんな、大丈夫ですって！ 孤児院はすぐそこだし ……」
EDG_A1_0055	エドガー	「そんなんじや彼も納得しないだろう」
LIZ_A1_0047	ライザ	「……（彼と言われて不服）」
EDG_A1_0056	エドガー	「これなら安心だろう？」
LIZ_A1_0048	ライザ	「……そうですね」
IRI_A1_0076	アイリス	「……わかりました」
EDG_A1_0057	エドガー	「それにしても本当に物騒だな、首以外はみつかったのか ？」
IRI_A1_0077	アイリス	「それが……全然みつからないんですって。過去7人分す て」
EDG_A1_0058	エドガー	「人ひとりを完全に隠へいするなんて難しいだろう。いく ら女だけとはいえ……」
		／／エドガーの失言。今はじめて連続殺人を知ったような口ぶりだったのに「 女だけ」と限定している。

LIZ_A1_0049	ライザ	「……？（なにか引つかかる）」
		//エドガーの失言に対して無意識で違和感を感じている。
EDG_A1_0059	エドガー	「死体はどこにいったのやら。埋めたか焼いたか……食べた、とかね」
IRI_A1_0078	アイリス	「もー！ ライザと同じこというんだからー!!!（少々大げさに）悪趣味ですよ悪趣味。案外二人似てるよね。、”悪”趣味があうのかも……」
		//エドガーの失言を正確に認識している。話をこまかすために少々大げさに声を張る。
EDG_A1_0060	エドガー	「へえ、君そんなこと言ったの？ 意外だなあ」
LIZ_A1_0050	ライザ	「あなたこそそんな冗談言いそうな人にはみえませんがね」
EDG_A1_0061	エドガー	「冗談、ね。確かにあまり言わないな」
		#07_ライザの違和感
LIZ_A1_0051	ライザ	「アイリス、バイトやめた方がいい」
IRI_A1_0079	アイリス	「どうして？」
LIZ_A1_0052	ライザ	「なんか、嫌な予感がするんだ」
IRI_A1_0080	アイリス	「理由になってないよ。初めて会ったとき印象が悪かったから、そんな風に思うだけ」
LIZ_A1_0053	ライザ	「いや、そうじゃなくて……危ういというか、直観が正しければあいつは……」
IRI_A1_0081	アイリス	「……それ以上はききたくないわ」
LIZ_A1_0054	ライザ	「ねえお願いだ。話を聞いてくれないか」
IRI_A1_0082	アイリス	「だってまた、エドガーさんの悪口なんでしょう？ 知ってると思うけど私はあの人のが好き。なのにどうしてその私にひどいことばかり言うの？」

LIZ_A1_0055	ライザ	「だからだよ!!! アイリスがあいつのことを好きだから……だから心配なんだ」
IRI_A1_0083	アイリス	「連続殺人鬼がエドガーさんだつて、貴方はそういうんでしよう」
LIZ_A1_0056	ライザ	「……っ、その通りだよ」
IRI_A1_0084	アイリス	「証拠なんて何もない直感なんですよ？ なのになんで決めつけられるの」
LIZ_A1_0057	ライザ	「それは……」
IRI_A1_0085	アイリス	「この辺りにしか出役しないから？ 日曜日にしか殺人をしないから？ 確かにエドガーさんはこの辺りに店を構えていて、私がいつもバイトでいるから日曜しか一人の日がないわ」
LIZ_A1_0058	ライザ	「言いたいことは今全部アイリスが言ってくれた」
IRI_A1_0086	アイリス	「そう……他にはもうないの？」 //先ほどのエドガーの失言に気づいていないのか探りをいれている
LIZ_A1_0059	ライザ	「ああ、それで全部だ」
LIZ_A1_0060	ライザ	(……全部？ 本当にそうなんだろうか。この頭の片隅に引っかかる何かが……)
IRI_A1_0087	アイリス	「そう。じゃあ私の心を変えるには不十分だわ」
LIZ_A1_0061	ライザ	「ホント、盲目とはよく言ったのもだよ……」
IRI_A1_0088	アイリス	「盲目で結構……つてこの前も言ったわねこれ。一つのことには熱中できるつてね、とつても素敵だよ?」
LIZ_A1_0062	ライザ	「わからないな」
IRI_A1_0089	アイリス	「辛いことも全部忘れて……楽しいことだけみていただけるの」
LIZ_A1_0063	ライザ	「モルヒネみたいなものつてことか」

IRI_A1_0090	アイリス	「くすっ、そうかもしれないね」
LIZ_A1_0064	ライザ	(なんて危うい……笑顔なんだろうか)
IRI_A1_0091	アイリス	「私はね、孤児院でも一番年上。つまりお姉ちゃんなの… …だから誰よりもしつかりしなくちゃいけない」
LIZ_A1_0065	ライザ	「それは強迫観念なんじゃない？ 別に誰かがアイリスにしつかりしろって言ったわけじゃないでしょ」
IRI_A1_0092	アイリス	「言葉にしなきゃ、望まれてないなんて……ライザは本当にそう思うの？」
LIZ_A1_0066	ライザ	「それは……確かに、アイリスはしつかり者でみんなの優しいお姉ちゃん……みんなそう言うしそうじゃないアイリスを想像もしないかもしれないけど」
IRI_A1_0093	アイリス	「私はそのことに関して出来る限りみんなの望むアイリスでいたいと思ってる。でも、ずっとずっとそんな風に頑張る続けるなんて嫌……孤児院を出たら、それもおしまい」
	<input type="checkbox"/>	
LIZ_A1_0067	ライザ	「孤児院を出るって……誰かに引き取られるってこと？」
	<input type="checkbox"/>	
IRI_A1_0094	アイリス	「私はもうすぐスクールも卒業する歳……今更引き取りたい人なんかいないわ。ライザくらいずば抜けて頭が良かったりすれば別だったかもしれないけれど」
LIZ_A1_0068	ライザ	「もしかして今バイトしてるのって……孤児院を出て一人暮らしをする資金を貯めるためだったりするのかな」
IRI_A1_0095	アイリス	「さすがね、そのとおりよ。でも……一人暮らしは寂しいかもしれないわね」
LIZ_A1_0069	ライザ	「……？」
IRI_A1_0096	アイリス	「早く素敵なお人を見つけられたら、それが一番いいんだけど！」
LIZ_A1_0070	ライザ	「それがあいつだって？」

IRI_A1_0097	アイリス	「そう思ってるわ……あの人はね。私にしつかり者でいてほしいなんて望まない……一人の女の子として扱ってくれ。それが何よりうれしい……例えその優しさが妹さんの代わりに向けられたものだとしてもね」
LIZ_A1_0071	ライザ	「あいつ妹とかいたのか」
IRI_A1_0098	アイリス	「うん、いつも写真を懐中時計に入れて持ち歩いているの」
	□	
LIZ_A1_0072	ライザ	「ふーん……でもアイリスは兄としてあいつを好きなわけじゃないんでしょ？」
IRI_A1_0099	アイリス	「もちろん、一人の男性としてみてる」
LIZ_A1_0073	ライザ	「それこそ本当の兄弟くらいに歳離れてると思うけどね……あの人がいくつ？」
IRI_A1_0100	アイリス	「23歳」
LIZ_A1_0074	ライザ	「じゃあ兄さんと同じ年だな。生きてたら」
IRI_A1_0101	アイリス	「ライザ、お兄様がいたの？ 唯一の肉親であるお母様が亡くなって孤児院にきたと聞いたけれど」
LIZ_A1_0075	ライザ	「父は……もつとずっと昔、事故で死んじゃったんだ。兄も同じ事故で行方不明」
IRI_A1_0102	アイリス	「そう……それは……」
LIZ_A1_0076	ライザ	「でも兄さんはとても優しくて優秀で自慢の兄さんだった。妹を泣かせたり、絶対しない」
IRI_A1_0103	アイリス	「エドガーさんだつて、普段は優しくてパン屋だつて行列ができるくらい人気なもの！ ライザったら嫌味ばかり言つて！」
IRI_A1_0104	アイリス	「そんなライザは嫌い」
LIZ_A1_0077	ライザ	(この笑顔を、ずっと守っていたい……そう思っているはずなのに。まったく正反対のことをしている。一体自分は心の底で何を考えているのか)

LIZ_A1_0078	ライザ	「……っ」
		#08_消えた死体はどこへ行く？
LIZ_A1_0079	ライザ	「(ここ)が殺害現場、か」
LIZ_A1_0080	ライザ	(あのパン屋からはそう遠くない。車を使えば死体を運ぶことも可能だ。でも何の証拠も残らないなんてあり得るのか?)
ISA_A1_0001	アイザック	「やあ君、その君」
LIZ_A1_0081	ライザ	「……誰ですか？」
ISA_A1_0002	アイザック	「あつはつは！ そりやその反応が普通だろうねえ！ ああ、そんな不快そうな顔をしないで。僕も君と同じさ、連続殺人の現場を見に来たんだ」
LIZ_A1_0082	ライザ	「なんで連続殺人の現場を見に来たとわかるんです？」
ISA_A1_0003	アイザック	「君面白いこと言うねえ？ 君みたいなきちんとした身なりの子が、こんな路地裏に他にどんな用事があるっていうんだい！」
LIZ_A1_0083	ライザ	「なるほど……それで、何か用ですか？」
ISA_A1_0004	アイザック	「いやあ、用という程の用はないんだよ。ただ現場を見に来たけど思った以上に何も無いから暇つぶしに声をかけただけなんだ」
LIZ_A1_0084	ライザ	「自分は忙しいので他をあたってください」
ISA_A1_0005	アイザック	「忙しいって？ (笑いながら) もうかれこれ10分以上(この)何もない場所に突っ立っていた君がかい？」
LIZ_A1_0085	ライザ	「……あなたは嫌な人ですね」
ISA_A1_0006	アイザック	「ああ、よく言われるよ」
LIZ_A1_0086	ライザ	「でしょうね」

ISA_A1_0007	アイザック	「アハハ、それでぞ。連続殺人に興味あるんでしょ？ なら僕と君はいわば同士なわけだよ。だから少し話をしてみたいと思っただのさ」
LIZ_A1_0087	ライザ	「連続殺人について？」
ISA_A1_0008	アイザック	「その通り。君はどうしてこの事件に興味を？」
LIZ_A1_0088	ライザ	「……実は殺された被害者は自分の姉なんです」
ISA_A1_0009	アイザック	「ほう！（身を乗り出して）」
LIZ_A1_0089	ライザ	「だから犯人を見つけて……捕まえてやりたい。その為に現場を調べに来たんですよ」
ISA_A1_0010	アイザック	「いいね！ なにかわかったことはあったかい？」
LIZ_A1_0090	ライザ	「この数分間でわかったことが2つあります」
ISA_A1_0011	アイザック	「うん？」
LIZ_A1_0091	ライザ	「一つ目はさっき言ったとおり、あなたはとても嫌な人だということ。そしてもうひとつは、あなたがどこかの雑誌、あるいは新聞社のライターだということです」
ISA_A1_0012	アイザック	「……これは驚いた。なぜ分かった？」
LIZ_A1_0092	ライザ	「この現場が殺人現場だとわかっていてやってきただけならタダの野次馬かもしれない。でもあなたはここで自分が動くのを10分以上もずっと待っていた。余程酔狂な人でない限りはそんなことはしない。そして殺人現場に一人佇む子供に声をかける行為……あなたは些細な事でもいいから情報を求めているのだと思いました」
ISA_A1_0013	アイザック	「警察……とかかもしれない？」
LIZ_A1_0093	ライザ	「警察はもう散々この場所を調べたはずだ。それに被害者の家族だなんて嘘が通じるはずもない」
ISA_A1_0014	アイザック	「嘘……参ったな、一杯食わされたわけだ」

LIZ_A1_0094	ライザ	「あ、あとその分厚い手帳とそれなりに身なりに気を使っているのに靴だけすり減って汚れているところが記者っぽかったですね」
ISA_A1_0015	アイザック	「なるほど……やっぱり僕と君は同類だ。君はとても嫌な大人になるよ」
LIZ_A1_0095	ライザ	「自覚していますよ」
ISA_A1_0016	アイザック	「アッハッハッハッハ！！ いや、これは大変失礼したよ。ご推察の通り、僕はヘンリー新聞社のアイザック・ウィルソンだ」
LIZ_A1_0096	ライザ	「……ライザです。みんなそう呼びます」
ISA_A1_0017	アイザック	「ファミリーネームは教えてくれないのかい？」
LIZ_A1_0097	ライザ	「ハウエルズ」
ISA_A1_0018	アイザック	「ライザ・ハウエルズ君か、よろしく。それで君は本当はなぜ、事件について調べていたんだい？」
LIZ_A1_0098	ライザ	「ただの野次馬ですよ……いや違うかな。何か違和感があって、それを解消したいんです」
ISA_A1_0019	アイザック	「違和感って？」
LIZ_A1_0099	ライザ	「連続殺人……現場にはいつも首だけが残っている。凶器も証拠も、手がかりは何一つ残されていない。首から下はどこへ消えたのか……」
ISA_A1_0020	アイザック	「海に沈めたんじゃないかとか山に埋められたんじゃないかとか色々噂されているね」
LIZ_A1_0100	ライザ	「でもそれっておかしくないですか？ 死体を隠すなら首を残すのはおかしい。死体を隠す理由は犯行が起こったことと自体を隠蔽するためでしょう」
ISA_A1_0021	アイザック	「じゃあ犯人は死体が見つかったてもよかつたってことかい？」
LIZ_A1_0101	ライザ	「だとしたらわざわざ首と胴体を切断しなくてもいい……結構骨が折れるはずですよ」

ISA_A1_0022	アイザック	「首の骨がかい？」
LIZ_A1_0102	ライザ	「……悪趣味な冗談はよしてください」
ISA_A1_0023	アイザック	「こりや失敬」
LIZ_A1_0103	ライザ	「……そう、文字通り首の骨を切断するのはとても骨が折れる。意味もなく行えることじゃない」
ISA_A1_0024	アイザック	「それが違和感？」
LIZ_A1_0104	ライザ	「他に何も証拠が残らないことも、ですね。首を残すんだつたら現場にもっと色々残ってていいはず。例えば大量の血痕があつても足跡は残っていませんし」
ISA_A1_0025	アイザック	「確かにそう言われてみると、犯人像がぼやけてくるなあ」
LIZ_A1_0105	ライザ	「……アイザックさんはどんな人物が犯人だと考えていたんですか？」
ISA_A1_0026	アイザック	「凄惨な手口、現場に首だけ残っている話題性……犯人は目立ちたがりやなんだと思っていたよ」
LIZ_A1_0106	ライザ	「目立ちたいがために首を落とした、ということですか」
	□	
ISA_A1_0027	アイザック	「でも目立ちたいならもっとやりようがあつたらうね。胴体だつて完璧に隠してしまう必要はない。いつそバラバラにしてロンドン中にまき散らしたほうが話題になるだろうさ」
LIZ_A1_0107	ライザ	「むしろ犯人の用は首から下にあつたと考えるのが妥当でしょうね」
ISA_A1_0028	アイザック	「おやおや、ゴシップ誌のようなことを言うんだね」
LIZ_A1_0108	ライザ	「……？ どういう意味ですか？」
ISA_A1_0029	アイザック	「被害者は若い女性ばかり……その首から下にしか用がない」
LIZ_A1_0109	ライザ	「……っ！！ さ、最低ですね貴方つて！！！！」

ISA_A1_0030	アイザック	「ああ失礼、そういう意味で言ってたわけじゃなかったのか。子供なのに結構グロいこと言うなって思ったよ」
LIZ_A1_0110	ライザ	「そんなわけないでしょう、まったく……不潔です」
ISA_A1_0031	アイザック	「でもシリアルキラーがそういった倒錯した性癖を持っているというのはざらにある話さ。何年か前話題になったジャック・ザ・リップパーもそうだったろ？」
LIZ_A1_0111	ライザ	「まあ……それは事実なんでしょうね。もしかしたらそういう犯人なのかもしれません」
ISA_A1_0032	アイザック	「しかしそうすると犯人は死体を一定期間保管した後処分しなければならぬ……」
LIZ_A1_0112	ライザ	「その処分方法が問題になりますね」
ISA_A1_0033	アイザック	「そうだな……跡形もなく消してしまわないといけない。肉は焼いたら異臭がしてすぐブルのし少なくとも骨だけにしないと」
LIZ_A1_0113	ライザ	「溶かすとか、食るとかですかね」
ISA_A1_0034	アイザック	「食べる!?!」
LIZ_A1_0114	ライザ	「冗談です」
ISA_A1_0035	アイザック	「僕より君の方がよっぽど悪趣味だな……」
LIZ_A1_0115	ライザ	「……ねえアイザックさん」
ISA_A1_0036	アイザック	「なんだい？」
LIZ_A1_0116	ライザ	「仮に人の肉を美味しく焼きあげてミートパイにしてしまつたら……食べた人はわかるんですかね？」
ISA_A1_0037	アイザック	「ハハハ、今度は都市伝説かい？ どうだろうねえ……ちやんと血抜きして臭みを消せばわからないのかもしれないな」
LIZ_A1_0117	ライザ	「……なるほど」

ISA_A1_0038	アイザック	「若い女だけ、だしね。おっさんよりは美味しくいただけそうさ。ああそういえば」
LIZ_A1_0118	ライザ	「女だけ……」 //何かを思い出しそう
ISA_A1_0039	アイザック	「その通りのパン屋の絶品ミートパイにもそんな噂があったな。まあ人気があるから妬んだ誰かが流したんだろうけど。にしても若いのにいい腕してるよなあ。エドガー・カルヴァアートだっけか。一回取材申し込んだんだけど断られてさあ……」 //だんだんフェードアウトして回想とクロスフェード 回想：エドガー「人ひとりを完全に隠すなんて難しいだろう。いくら女だけとはいえ……」
LIZ_A1_0119	ライザ	「……ちよつと、まって」 //思い出す //エドガーの失言から会話冒頭までを逆再生
LIZ_A1_0120	ライザ	「ああ、そうか……違和感の正体は……」
ISA_A1_0040	アイザック	「カルヴァアート氏は無愛想すぎるのが難点さ。イケメンなんだからもっと気さくに笑ってりやもっと人気ができるだろうに……つて、ん、んん？ なになに、何がわかったっていうんだ？」
LIZ_A1_0121	ライザ	「え？ カルヴァアート？」
ISA_A1_0041	アイザック	「カルヴァアート氏の話してたんだけど……聴いてなかったね？」
LIZ_A1_0122	ライザ	「ちよつと待ってください、なんでここでカルヴァアートの名前が出てくるんです？」
ISA_A1_0042	アイザック	「いや君が言ったんじゃないか人肉ミートパイつて。あれって最近大人気のエドガー・カルヴァアート氏が経営するパン屋のゴシップだろ？」

LIZ_A1_0123	ライザ	「エドガー……、カルヴァートですって……？」
ISA_A1_0043	アイザック	「一人で納得して一人で驚愕して忙しい子だな……」
LIZ_A1_0124	ライザ	「す、すみません急用ができましたので僕はこれで……」 //ライザ走り去る
ISA_A1_0044	アイザック	「お、おい……！ ……これはスクープの臭いかな？」 //アイザック追いかける #09_忘れられない彼女の……
EDG_A1_0062	エドガー	「……それで、俺を問い詰めてどうしたいんだ。自首してくれとでも？ それとも金でもゆするのか」
IRI_A1_0105	アイリス	「そんなことしません。……だって、私はエドガーさんのこと大好きなんです」
IRI_A1_0106	アイリス	「最初の事件の日、たまたま私は高熱を出した子のために夜遅く孤児院を出て薬をもらいに行っていました。そして事件現場を見てしまった」
EDG_A1_0063	エドガー	「それは……運が悪かったな」
IRI_A1_0107	アイリス	「いいえ、むしろとっても幸運だったんです。だってそのおかげで私はエドガーさんを助けることができたんですよ！」
EDG_A1_0064	エドガー	（ああやっぱり似ている。この笑顔……大好きだった妹に）
IRI_A1_0108	アイリス	「あの時偶然通りがかっていなかったら、事件現場でエドガーさんの懐中時計を拾うことはなかった」
IRI_A1_0109	アイリス	「カルヴァート、この名前を見て犯人はエドガーさんだつたんだと確信しました。だから私は現場の懐中時計と証拠になりそうな凶器を持ち去った」

IRI_A1_0110	アイリス	「知っていましたか？ あの事件以来……毎回私は証拠品を処分してたんですよ。エドガーさんって結構うっかりさんなんです、私がいなかったら今頃捕まってるかも」
EDG_A1_0065	エドガー	「さすがに首は持ちされなかったか」
IRI_A1_0111	アイリス	「重たいし処分に困っちゃいますから」
EDG_A1_0066	エドガー	「……」
IRI_A1_0112	アイリス	「ああでも、ライザと話してた時のエドガーさんにはびっくりしちやいましたよ。うっかりしすぎです。初めて事件を知ったように振る舞ってたのにいきなり”被害者は女だけ”なんて言い出すんですもん！ ヒヤヒヤしちやいました」
EDG_A1_0067	エドガー	「失言だったみたいだ」
IRI_A1_0113	アイリス	「ま、ライザは気づいてなかったからセーフですけどね」
	□	
EDG_A1_0068	エドガー	「……それで話は戻るが」
IRI_A1_0114	アイリス	「はい？」
EDG_A1_0069	エドガー	「俺が犯人だということを知って、今まで知らないふりをしてきたアイリスがなんだって突然俺にこんな話をする？」
IRI_A1_0115	アイリス	「私もうすぐ卒業なんです」
EDG_A1_0070	エドガー	「は？」
IRI_A1_0116	アイリス	「スクールを卒業するんですよ。つまりはら、結婚できるじゃないですか？」
EDG_A1_0071	エドガー	「君は俺と……結婚したい、ということか？」
IRI_A1_0117	アイリス	「はい。お店のお手伝いもいっぱいします、ミートパイ作りもですよ？」
EDG_A1_0072	エドガー	「……狂ってるな」

EDG_A1_0073	エドガー	(毒気のない笑顔が似ていると思った。でもほんとにリサはこんなだったか?)
IRI_A1_0118	アイリス	「狂ったエドガーさんにはお似合いのお嫁さんだと思いませんか?」
EDG_A1_0074	エドガー	(俺が狂ってしまったから……お前も、一緒になってしまったのか?)
EDG_A1_0075	エドガー	「ああ……そうかもしれない……」
IRI_A1_0119	アイリス	「じゃあ……!」
EDG_A1_0076	エドガー	「そうだな、じゃあ初めての共同作業でもどうだ? 地下に昨日調達した肉がある」
IRI_A1_0120	アイリス	「わあっ入刀ですね、素敵! 行きましょ行きましょ!」
	□	
EDG_A1_0077	エドガー	(リサはとても優しくかった。可愛かった。……美味しかった。そう、最上の味)
		//アイリスが歩いて行く //後ろからエドガーがついていく //階段を降りる音 //降りきったところでそのままエドガーがアイリスに殴りかかる
EDG_A1_0078	エドガー	「ふんっ!!!!」
IRI_A1_0121	アイリス	「えっ!?!」
		//もう一度殴ってアイリスは倒れる
EDG_A1_0079	エドガー	「穢れてしまう前にあの時と同じ笑顔であるうちに、そうあの時と同じ間に食べてしまわなければ……!」
		//切り刻む音
EDG_A1_0080	エドガー	「(むさぼるように咀嚼)」
		//階段を降りてくる足音

LIZ_A1_0125	アイザ	「ねえ……アイリスはあの時と同じ味がした？ ……兄さん」
		<p>〃鬱々として、後悔たつぷりに</p> <p>〃主題歌挿入もしくはギャストコール</p> <p>#10_エピローグ</p>
ISA_A1_0045	アイザック	『1887年12月21日 午後6時43分エイヴオリー通りの路上にて若い男性が馱馬車に轢かれ死亡する事故が発生した。被害者の男性はエイヴオリー通りでパン屋を営むエドガー・カルヴァート (23) 目撃者の証言によれば、カルヴァート氏は何かに追われているような鬼気迫った表情で道路へ飛び出し、ちょうどやってきた馬車は避けきれず彼を轢いてしまったという』
		〃新聞を読み上げている
ISA_A1_0046	アイザック	「だが驚くべきはここからだ。なんとこのエドガー・カルヴァート氏は、ロンドンを恐怖のどん底に陥れた首切りジヤックだったというのだ！これまで7人もの若い女性を殺害し、その首だけを現場に残したシリアルキラー。その正体がまさか今大人気のパン屋の主人だったとは誰が考えただろうか？』
		〃新聞を読み上げている
ISA_A1_0047	アイザック	『ところでベーカリーマケニットといえはこんな噂があった。“マケニットのミートパイには人肉が入っている”馬鹿げた噂だと一部の低級ゴシップ誌しか取り扱わなかったが彼が連続殺人鬼だとすると一気に信憑性がでてくるだろう。マケニットのミートパイにはファンも多く、ロンドンで食べたことのない人のほうが少ないのではないかというほど。もしかすると読者の中にも口にしてしまった人が……』
		〃新聞を読み上げている、最後は読みかけでとまる
ISA_A1_0048	アイザック	「これじゃあまるつきり大衆紙じゃないか！ 低俗で悪趣味な内容、読者の不安を煽って、混乱を招いている」

ISA_A1_0049	アイザック	『カルヴァアート氏は10歳の頃、父・母・妹と4人でキャンプへ行き遭難した事があった。その際に家族とはぐれ、一人助けだされた彼はエイヴオリー通りのパン屋を営む老人に引き取られパン屋の息子として第二の人生を歩むことになる。だがどこでネジが外れてしまったのか、彼は連続殺人鬼へと成り果てるのだ』
		／／新聞の朗読
ISA_A1_0050	アイザック	「だが、真実はそうではなかった……くそ、大衆紙のゴシップより悪趣味な真実なんて書いたところで僕のイメージが下がるだけだ」
		／／独り言
ISA_A1_0051	アイザック	「エドガー・カルヴァアートは遭難した際、口論の末に父親を崖から突き落とした。それを見た母親は妹を連れ、エドガーをおいて逃げ出した。その後エドガーも、母親と妹も救助されたが母親はエドガーを迎えに行かなかった。これが10年前にあった事件の真実……彼の妹であるエリザベス・カルヴァアート……いや、エリザベス・ハウエルズがそう語った」
		／／モノローグ
ISA_A1_0052	アイザック	「君がまさか、あの殺人鬼の妹だと言い出すなんて思わなかったよ。ライザは本名じゃなかったわけだ」
LIZ_A1_0126	ライザ	「本名はエリザベス、でもみんなライザと呼びます。昔は……家族はみんなリサと呼んでいたけれど、もういないから」
LIZ_A1_0127	ライザ	「私が弱かったから……ただ兄に縋るだけの存在だったから兄さんはあんな風になってしまったと……これからは強く生きようと」妹のLisa（リサ）」であることを辞めたんです」
		／／アイザックに真実を語るライザ（エコー処理）
LIZ_A1_0128	ライザ	「……兄さんは優しすぎた。少ない食料の中で自分の分をいつも私に分けてくれていたから……きつと誰より空腹だった。だから壊れてしまった」
		／／アイザックに真実を語るライザ（エコー処理）

LIZ_A1_0129	ライザ	「……” Lisa (リサ) ” を捨てていなければ、” Liza (ライザ) ” でなければ……兄さんを、救えていたんでしょっか」
	□	//アイザックに真実を語るライザ (ヒーロー処理)
ISA_A1_0053	アイザック	「ほんと……胸糞悪い、最低な結末だよ」
ISA_A1_0054	アイザック	「なぜ彼がこのような残虐な犯行に及んだのかは定かではない」
		//モノローグ //下